

「オネエ所長の調査ファイル」 # 5

山崎浩治

1

「今日は長丁場になるわ。だから、トオルちゃんのために愛妻弁当作ってきたの」

「金沢プライベート・リサーチ」のオネエ所長・市山が手作りポーチから、イチゴ柄をあしらった弁当箱を取り出した。市山は地味な着物に白いかっぱ着という小料理屋の女将風ファッション。しかも三輪明宏そっくりの髪型と厚化粧なので、自宅に招いた依頼人の和子(78歳)は度肝を抜かれて仏間に引っ込み、仏壇に向かって一心に念仏を唱え始めた。よほど怖い思いをしたのだろう。

「あたしって料理上手に床上手なの。いいお嫁さんになるわよ、トオルちゃん。もっとも、赤ちゃんは産んであげられないけどね。その代わりに、あたしとエッチする時は避妊しなくてもいいのよ」

「はいはい、そうでしょうとも……では遠慮なく、頂きます」

市山の饒舌を受け流し、弁当のおかずを頬張ったイケメン調査員の透が「うまい！」と歓声をあげた。

「なんか懐かしい味がしますよ。所長って、本当に料理上手だったんですね。見直しました！これ、`おふくろの味、ですよ！」

「喜んでもらってうれしい。コンビニの幕の内弁当を詰め替えてきた甲斐があったわ」

「……」

市山と透が金沢市内にある和子の自宅応接間で、電話と対峙している。和子の長男、学(51歳)を名乗る男から「不倫がバレて示談金が必要だ。助けてほしい」と電話があったのは昨日のことである。「長男のことが心配だが、オレオレ詐欺かもしれないと思うと怖くて電話に出られない」と和子がこの日の朝、「金沢プライベート・リサーチ」に相談。午後から待機したものの、夜8時を回っても長男を名乗る男から電話はかかってこなかった。

「依頼人が相談に出ている間に電話があったのかもしれないわね。今日はこのへんで切り上げましょう」

腰を上げた市山に、透がかみついた。

「夜中に電話がかかってきたら、どうするんですか！」

「振り込め詐欺の電話なら夜中にかからない。家族がいるかもしれないからね。依頼人には万一、電話があった場合は出ないようにしておくわ」

2

和子の家は歴史を感じさせる門構えの大邸宅である。15年ほど前に夫、義母が相次いで亡くなり、以来、和子は一人暮らし。国家公務員の長男は東京、医師に嫁いだ長女は名古屋で家族とともに暮らしていた。

翌朝8時、市山と透は再び和子の自宅応接間で待機を開始した。和子はピンクのかっぱ着を

着た市山と目を合わさないように出迎えると昨日と同様、仏間に閉じこもり、仏壇に手を合わせるのだった。

「電話の相手は長男の名前を名乗ったというから、案外、本物かもしれませんね」

透の言葉に、市山が首を振った。

「いまどき、振り込め詐欺で『オレだよオレ、なんて古典的なセリフをいう輩はほとんどいないと考えた方がいい。本当の子どもや孫の名前だって名乗るわよ。長男は金沢の高校を卒業したそうだから、名簿を使って調べたのかもしれないわね」

「それならオレたちに頼まなくても、長男に確認した方が早いでしょう」

「依頼人は今回の件を子どもたちに知られたくないと言ってるの」

「それはまた、どうして？」

「本人が言いたがらないのよ」

市山がトイレに立ったついでに、邸内の様子を観察した。1階の床には車椅子で移動できるようにピカピカのフローリングが施され、介助しやすいように広く、手すりのついたトイレや浴室など、至るところに真新しいバリアフリー工事が目立つ。用を足して応接間に戻ると、透が退屈しのぎにスマホを操っていた。

「振り込め詐欺などの被害額は昨年559億円で、過去最悪だそうですよ」

「相談すらできずに泣き寝入りする人もいることを思えば、被害金額はきっと氷山の一角でしょうね」

二人がそんな会話をしていると、昼前に電話が鳴った。

3

大企業に勤める夫は定年退職後、嘱託として65歳まで働き、現役を退いた後、実家のある金沢にやってきた。宮仕えから解放された夫は日がな一日ごろりと横になって、テレビ三昧の毎を送る。特に持病もストレスもなかったはずなのに、悠々自適の生活を始めて2年目、心筋梗塞であっさり逝った。転倒による骨折から寝たきり、認知症というコースをたどっていた義母も夫の後を追うように他界した。

和子は県外の生まれだが、両親の死後、故郷の親戚とは疎遠になっている。転勤族の妻だったので、金沢にも親しい知人はいない。一人暮らしの老後は不安だったが、独立して県外で暮らす2人の子どもの世話にはなりたくなかった。それが親心というものだ。子どもの方だって親に頼られたら、迷惑以外の何ものでもないだろう。

幸いなことに夫の家は祖父の代からの資産家で、億単位の財産があった。和子が生きている間、経済的に困ることはない。足が不自由になって家事がおぼつかなくなるか、認知症の症状が出始めたら、サービスの行き届いた高級老人ホームに入居すると決めている。費用は少々高くつくが、子どもたちにとっても、その方が好都合だろう。

そんなふうを考えていた矢先、作業着姿の好青年が家に現れ、「いまなら格安でバリアフリーの家のリフォームできますよ」と持ちかけてきた。青年は親身に和子の話に耳を傾け、警戒心が

解けたところでリフォーム工事を次々と提案した。廊下にトイレ、浴室、玄関ホール。勧められるままに行った工事費用は瞬く間に300万円を超えた。だまされた実感はなかったが、正月にしかやってこない子どもたちがリフォームした家を見て「悪徳業者に引っかかった！」と騒ぎ出す。

「いずれ老人ホームに入るつもりなのに、リフォームなんかしてどうするんだよ！ もっと早く教えてくれれば、クーリングオフできたのに！」

「テレビや新聞でこんなに報道されてるのに、どうしてだまされるの？ お母さん、ボケたんじゃないの？」

子どもたちから責め立てられ、だまされた憤りは自分自身に向けられた。自分が情けない。恥ずかしい。以来、電話が鳴るのが怖くなり、外に出るのがおっくうになった。人と会うのが怖くて外に出られないのだ。毎日、仏壇に手を合わせて念じるのは「これ以上、長生きしたくない。早くお迎えが来てほしい」ということだった。そんな時、長男を名乗る男から電話がかかってきたのだ。

4

「もしもし、オレ。学だけど」

電話の相手が言った。

「あら、おかしいわね。あたしがこの家の学くんだけど。おたくはどこの学ちゃん？」

相手が絶句し、いきなり電話を切った。アカンベをして受話器を置いた市山に、透が不満そうに唇をとがらす。

「`金を渡す、と言って犯人を呼び出して、とっ捕まえてやればよかったのに」

「あたしが言っても詐欺師は乗ってこないわ。電話が鳴るのさえ怖がっている依頼人に犯罪者相手に一芝居打ってくれ、なんて言えないでしょ？」

応接間にやってきた和子が市山の報告を聞き、とつとつと切り出した。

「リフォーム業者にだまされて、子どもたちの信用を失いました。長男は私の財産を管理したいと言っています。今回の一件を知ったら、やはり私に任せておけないと後見人を立てると言い出すでしょう」

「だから長男に確認するのを嫌がったのね……少し家の中を見せてもらったわ。食事は宅配サービスで、買い物にもほとんど出かけてないようね。あなたは要支援も要介護の認定も受けてないんだから、もっと外に出ましようよ」

「近くのスーパーまで歩いて10分以上あるんですよ。出歩いて転ぶのが怖いんです」

「親しいお友達はいないの」

「友達はいません。昔から人と関わるのが苦手なんです」

「だからって家に閉じこもってばかりいたら、ボケちゃうわよ」

「認知症になったら施設に入ります。どうせもう年なんだもの」

「そんなこと言わないで。今日のあなたはこれからの人生で一番若いのよ。人生で怖いのは病

気じゃなく、自分の人生にあきらめてしまうこと」

市山が強い口調で、叱るように言った。和子はその言葉が胸にすっと染み込んでいくのを感じた。

5

その日以来、長男を名乗る男から一度も電話はかかっていない。市山は自宅の電話を常に留守番電話にしておくよう、和子にアドバイスした。詐欺師は自分の声が録音されるのを嫌がるし、仮に声が吹き込まれた場合でも詐欺師と直接会話をしないで済むので、警察に相談するなど落ち着いて対応することができるからだ。

さらに和子の夫の菩提寺に連絡を取り、月命日には和子の家で読経してもらおうよう頼んだ。信心深い和子にとって、定期的に訪れる僧侶は心強い相談相手になるだろうという配慮だった。

それから数カ月後、市山と透が様子を見に行くと、和子は小型犬を連れて近所の公園を散歩していた。市山は巻き髪のエクステをつけ、下着が見えそうなミニスカートの下には素足とロングブーツという、まるで若い女の子のような格好をしている。スカートからはみ出たすね毛をきれいに剃っているのは、エチケットのつもりだろうか。

「少しは自分の年齢を考えて下さい！」

透がぴしゃりと言うと、市山が遠い目をして答えた。

「少女だったあたしはもういない。でもね、オシャレはタイムマシンなの。10代の時のお洋服を着れば、世知辛い日常をしばし忘れて、初恋にときめいてた少女時代のあたしに戻ることができるのよ」

「……って、所長の人生のどこを探しても少女時代なんかありませんよ！」

犬のリードを引いた和子がすっかり春めいた公園を足取り軽く歩いている。10分歩くのもおっくうがっていたのが嘘のようだ。

「依頼人に犬を飼うように勧めたのは所長なんですよ？」

「犬はいつも飼い主の顔色を窺う。全身全霊で依存してくるから、飼い主はうっかり病気もできないのよ」

犬を連れてきた同年配の女性と親しげに談笑する和子を見つめながら、市山が続けた。

「振り込め詐欺の被害は、周囲に相談すれば防げる、と言うけど、一人暮らしのお年寄りの近くにどれだけ親しい人がいるかしら。それに高齢になって新しい友人を作るのも難しいわ」

「だからこそ、ペットを介して友達を増やそうとしたんですね」

「遠くにいる子どもより、近くにいる他人。一人で生きていくつもりなら、誰かに頼ることを覚えなきゃ」

しばらくして和子から市山に礼状が届く。その末尾にこんな言葉が添えられていた。

「あなたは私の大切な女友達です。たとえ喉仏があったとしても」